

1988年フランス・アカデミー最高脚本賞受賞

あなたの舌は敏感ですか?



ガルメアカデミー



TOLÉRANCE

ウーゴトニャッツィ ● ルパート・エヴェレット ● アンヌ・ブロシェ

監督・脚本/ピエール=アンリ・サルファティ ● 美術/ベルナルル・ヴェザ ● 衣裳/ドミニク・ポルグ ● 音楽/ベルナルル・カヴァンナ ● 1988年/フランス映画/シネマスコープ DOLBY DIGITAL ● 配給/デラ・コーポレーション ● 協カ/NEOアベニュー

グルメ・アカデミー

TOLÉRANCE (上映時間1時間48分)

ルパート・エヴェレット ● ウーゴ・トニャツィ ● アンヌ・プロシエ

監督・脚本: ピエール・アンリ・サルファティ ● 1988年/フランス映画/シネマスコープ

配給: デラ・コーポレーション ● 協力: NECアベニュー

1988年フランス・アカデミー最高脚本賞受賞

究極の快樂を(食)に求める貴族と、 禁欲生活を送る修行僧との 華麗なグルメ合戦

18世紀末。英国の修道院を追われた修行僧アシュルスは、フランス革命を生き延びた中流貴族マルモンの妻トランスに、叔父の遺産として引き取られる。快樂主義にうつつを抜かし、美食の殿堂グルメ・アカデミー設立に情熱を傾けるマルモンに愛想をつかしていた彼女は、夫とは対照的に禁欲的苦行に励むアシュルスに好奇心と畏敬の念をかきたてられ、やがて自らも精神修行を盾に、夫との関係を拒みだした。

ある夜更け、厨房に下りたマルモンは、御馳走を貪り食うアシュルスの姿を発見する。断食ばかりか沈黙の禁も破った修行僧は、最大の苦行——快樂に身を投じるためにマルモンの助けを乞うのだった……。

悪徳と美德は同一だ。

こうして、あっと驚く大逆転へとなれ込むこの作品について「ビザールな(奇妙な)悲喜劇」と語ったのはアシュルス役のルパート・エヴェレット。実際、ここで彼が見せる演技がまずはビザールそのもの。「アナザー・カントリー」以来、英国美青年アクターの代表的存在となった彼が、いきなりミノ虫のお化けのようないでたちで木箱を飛びだし、奇妙なうめき声と共に、ヒョコヒョコと狂ったゼンマイ仕掛けの人形然と前進を始めるのだ。

ほとんどモンティ・パイソンのですらあるこの登場シーンのいかがわしさには、爆笑も通り越し、まさにあいた口がふさがらない。おまけにその彼が、墮落を知ること、快樂主義こそが悟りへの道と、悪魔的青年オラス・ワロップに変貌する後半では、少女漫画から抜け出したような貴公子ぶりで、大まじめで、全開してしまうのだ。

というわけで、一体これはどこまで本気の所業かしらと、否応なしに頭をもたげるアシュルスの「苦行」にむけての問いともなる。なにしろワロップとなった彼は迷いなく快樂を極め、のみならず、マルモンの財産も妻も、



そしてグルメ・アカデミーという情熱までもとりあげた上、遂にはその生命さえも奪い去ってしまうのだから。

無論、こうした彼の振る舞いは、アン・ラドクリフの「イタリアの惨劇」、マシュー・グレゴリー・ルイスの「マンク(破壊僧)」と、18世紀英国暗黒小説にみられた、「悪の華」的修行僧をかすめてバイロンの放蕩児に至る墮天使たちの例をカイマみる楽しみを与えてもくれるだろう。あるいは、そんな「典型」がギロチンに熱狂する革命後のフランスへと渡ったその後を思ってみることもできる。

最大の苦行は、 快樂に身を投じること。

しかし、それにも増して注目したいのはやはり禁欲の極みが快樂主義を導き出す事次第。挙句の果てに、ワロップの前で、マルモンが示す変化に見られる通り、その逆もまた真なりとの、大いなる生の皮肉に他ならない。さらには「トランス」(寛容)も、「イントランス」(不寛容)の極みにありそうなこと。対極にある善の何かが円周の起点と終点であってしまふ相対性。

さて、現代にも通じるこの皮肉な視点をもって脚本で'88フランス・アカデミー最高脚本賞を受賞。長編及びデビューのチャンスをつかんだ監督ピエール・アンリ・サルファティ

の語り口も、エヴェレットから引きだし、どこまでが本気か、このビザールな味わいをあくまで貫いて見せる。涼やかに風をはらんで庭園をめぐる若妻を美しくきりとる映像は、一方でドタバタの笑いのタイミングや、グロテスクな美食の追及ぶりをつきつけもするのだ。ちなみに監督の最新作は「卵のお話」なる短篇とか。

快樂主義者マルモンに「最後の晚餐」のウーゴ・トニャツィ、タイトルロールの若妻にシャプロルの「MASQUES」で憂いを含んだ無表情演技を披露、ドナルド・デュラン主演の「シラノ・ド・ベルジュラック」でロクサーヌ役をいとめたアンヌ・プロシエを配したキャストも見ものだ。

川口敦子
映画評論家

ユーモアとこっけいに満ちたインテリジェンス。
豪華な映像、贅沢なバロック調の音楽、
サルファティは驚くべき寓話を作り上げた!

——— テレ・スター誌 ———

今年、37歳のサルファティは大学で建築と哲学をそれぞれ学び、'82に処女短篇「バルラエウスの鋳物」を監督し、翌年のカンヌ映画祭に正式出品され、ジャン・ヴィゴ賞に選出される。以来、短篇映画作家として、アート関係の題材を取り扱った作品を次々と製作し、シャルムース・ユーモア映画祭のグランプリを始め、名だたる短篇映画賞を受賞し、注目を集める。

そして、異色のキャスティングの本作で長編映画デビューを飾る。これは、一味違う風変わりの作風が評価され、セザール賞第一回監督作品ノミネート、'88フランス・アカデミー最高脚本賞受賞となる。サルファティは最も期待できる風変わりなシネアストである。

そして、美術は、「カミーユ・クローデル」でセザール美術賞を受賞したベルナル・ヴェゼ。目を見張る中世の美術を見事に再現している。次いで、この作品で18世紀の豪華な衣装の数々をデザインし評判となったドミニク・ボルグ。また、音楽は、ローマ賞を受賞したベルナル・カヴァンナが担当し、バロック調のオリジナル曲を作り、フランスではサントラも発売されている。



10月5日(金) → 11月7日(水) 独占公開!

前売鑑賞券1300円絶賛発売中! (当日/一般1600円・学生1300円)

土・日・祝	夜8時より	月 → 金	夜9時より
ユーロスペース TEL.461-0211 渋谷駅東急プラザロ下車2分 東急観光うしろ			